

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第四十五卷 「社会科学（二の五）」

個人・自然人と国家内地縁人間集団・共同体（村落、町内会、地域社
会、友人、学級、学年、部族、民族、外国人街、国民）

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第四十五巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、個人・自然人と国家内地縁人間集団・共同体（村落、町内会、地域社会、友人、学級、学年、部族、民族、外国人街、国民）に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

「でーれーきよーてー」（岡山弁）を東京の地で使いそうになる

日本人女性と中国人女性の共感覚の違い

第三編 三十歳～三十九歳

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

編纂中。収録を待たれよ。

「でーれーきよーてー」（岡山弁）を東京の地で使いそうになる

二〇〇八年三月十四日 起筆、擲筆、公開

昨日ふと、ある拍子に、私の地元の岡山弁で「たくさん」や「とても」を意味する「でーれー」、「怖い」を意味する「きよーてー」を口にしそうになった。非常に驚いたことがあって、「でーれーきよーてー」と言いそうになったわけだ。

岡山弁は、全国的に見ても、かなり（あるいは最も？）汚い（下品な）方言だと言われる。東京から見ても京阪から見ても、そういう意見が多いのを聞く。どうしてそう言われるのかと思って、個人的に考えたことがあって、出た結論はいくつかあるのだが、最たるものの一つは、「岡山弁は何でも」エ行”で言う”ということではないかと思う。例えば、「そんなことをしたらいけませんよ」を「そげえなことをしたらおえんよ」と言う。（「そげな・そげえな」そんな）「おえん」いけない・駄目”です。ちなみに「おえん」は、兵庫県の赤穂市や相生市の人にも広島県福山市の人にも通じないことを個人的に確認済み。）

母音をエ行に入れ替えるだけで下品で卑俗的な響きになる、という感覚や体質は、日本語では昔から当たり前と言えれば当たり前だ。あえて例を挙げるなら、「好き」が「好け」となって、「すけべえ」となる、ああいう感覚。それが岡山に生き残っていることが、岡山弁を全国で最も下品な方言にしているのかもしれない。そう思うと苦笑するが・・・。基本的には、兵庫県西部までは京阪方言で、県境を越えて岡山に入った途端、江戸アクセントに戻る。あれがいまだに不思議だ。とにかく、岡山弁には「粹」も「あはれ」もあつたものじゃないと言われることが多い。ちよつと複雑だ。思わず、サ行やタ行がシャ行になる広島弁をしゃべる人のほうが可愛らしいのではないかと不安になる。（「書きなさい↓書きんしゃい」、「そうだから↓そうじゃけん」などが広島弁。） ちなみに、サ行が昔はシャ行に近い発音だったのは、文明開化以前の日本人全体の癖で、江戸時代はじめあたりにサ行に落ち着いたのだろうが、江戸から遠い広島や九州と東北方言などにシャ行が残っているのは、理屈に合う。

一方、岡山弁には他にも、重複する母音が出てきたらイ行かエ行に変えて（時にア行やウ行も）、母音を一つにする、という傾向があり、例えば、「月を見なさい」を「月ゆう見んせえ」（つきゆうみんせー）と言う。「とても」を意味する「でーれー」にはバリエーションがあり、「どーれー」「どえれー」「でーろー」「ぼんげー」「ぼっけー」など。「あげーなことをするんは、でーれーやっちもねー。」（あのようなことをするのは、まことにおかしなことです。）などと使う。とにかく

く、ア行・ウ行・オ行よりは唇をベーツと横に広げ、しかもイ行の鋭さを嫌って力を抜いてエ行に偏重するような体質なり風土というもの、岡山にだけあるのかと思って、色々瀬戸内海の気候や神話を見ているけれども、それほど隣の県とも違うわけではないのだ。

ただ最近では、広島や神戸や京阪などの大都市よりも平野が広いのに人口密度が低かったことが岡山方言に与えた影響だとか、岡山が江戸時代には、関東平野ないし下町の適度な好色の体質や「いき」文化のミニチュアであった、とかいうことを考えている。それに、なぜ岡山弁は周辺との連続性がないかと言えば、岡山は歴史的に見て自給自足が可能な県だったからではないかというのが、私の持論である。米も作る、果物も作る、野菜も作る、魚もとる。まあ、話せば長くなるので……。ちなみに、岡山の地方局の天気予報では、最初は隣の広島と兵庫の天気は言わずに、岡山・香川の天気予報をセットで言う。いまだにそうなのが面白い。瀬戸大橋の影響もあるが、もともと隣の県とは言葉や習俗が違うという意識がどこかにあるに違いない。これを「吉備豪族時代以来の、岡山の過剰で微笑ましい誇り体質」と個人的には呼んでいる。

しかし、岡山弁にも誇れるところはあって、例えば「きよーてー」（恐ろしい）は、『源氏物語』にも使われていながら、今や全国で岡山の県北や鳥取の一部にしか残っていない言葉である。（私は県南出身だ

が。）『源氏』では「夕顔」の帖で、「けうとく（気疎く）もなりにける所かな」と使われていた。京都では「きよーとい」でまだ通じるかもしれないが、岡山では「きよーてー」と口を横開き状態にすると思える。『源氏』などを読んでみると、「これは岡山弁じゃないか」と思うことが時々ある。確かに吉備地方は、我が国の黎明期を知ろうとするときに、京都・奈良や九州北部に匹敵する重要な土地なのだが。

さて、なぜこういう話をするかと言えば、母語である日本語や、地方に残る方言を大切にすることは、人（日本人）が共感覚を失わないうために持つておくべき大切な姿勢ではないかということ、思っているからだ。私は今65歳ではあるけれども、「マジ」や「ウザイ」や「キモイ」などの言葉を日常会話でも書き言葉でも一度も使ったことがないわけで、ただ、今の世の中はそういう姿勢のほうを妥協しないと、まともに同世代の人と会話ができないこともあるから、時代の流れと言うか、非常に皮肉で残念なことだと思っている。もちろん、自分の言語観を崩すつもりはないけれど。こういうことを言うと、また科学者の方から「科学的根拠がない」とメールで怒られるかもしれないが、私の周りにいる共感覚者、特に女性の方々は、非常に言葉・日本語が丁寧で、感心しているということは、どうしても言ってみた。

もちろん、「マジ」や「ウザイ」なる言葉自体に責任があるわけではなく、使う人に責任があると思う。例えば、「ウザイ」は、東京の老人語「ウザツタイ」だったのが、若者に蔓延して、適当に省略されて、しかもそれを「標準語」のように全国の他人に対して使う。かえって方言としての「ウザツタイ」の本拠と本義が隠れてしまう。今どきの女子高生は、「ウザツタイ」が方言であることに気付いているのだろうか……。

とにかく、人の知覚やその土地の風土と、その上に乗っかっている言葉というのは、常に一緒に語ってこそ、面白さがあるのだと思う。

日本人女性と中国人女性の共感覚の違い

二〇〇九年四月二十五日 起筆、攔筆、公開

DSCF0982m.jpg

先日、中国人女性（二十代半ば）の方と英語で共感覚を語り合った。これまでも中国人（や、その血を引く華僑）の共感覚者や共感覚に関心のある人たちとはメールをしてきたが、実際にお会いするのは、今回が初めてだった。中国人も、共感覚者には女性が圧倒的に多いのだろう、今のところ連絡が来たのは女性ばかりだ。（僕は本当

は、漢人・漢民族と呼ぶべきだと思っているが。漢人＝中国人ではないので。）

「人間が物を“見る”というのは、必ずしも眼で“見る”ことを指しているのではなかったはず」ということを中国人女性と語り合えたのは、実に大きな経験だった。中国人男性の共感覚も知ってみたい限りだ。普通話（＝標準の漢語、北京語）が母語の人ではなかった。僕がちよつと普通話で話しかけても、さっぱり通じなかった。（いや、そもそも僕は、人前でしゃべるのが苦手で、下手をする）と日本語さえもおぼつかない（！）のだけれど……。）それはともかく、「中国語の方言はもはや外国語のよう」というのが本当であることを実感。

それにしても、中国人女性の感覚を日本人男性が英語で知ろうとすること自体に本当は無理がある。こういうときに英語や欧州語を使うというのは、本当は極めて危険だし、野暮なことであって、英語がベラベラしゃべれるよりも、相手の母語を少しでも知っているほうが、有意義な会話になる。

日本人女性と漢民族女性の決定的な違いは何か。それは、漢民族女性における「曲線美を有する表音文字の非在」である。こればかりは、僕が日本人女性と漢民族女性の「感性」を見ていて、どうしよ

うもなく実感する差異である。

漢民族は、そもそも漢字以外の文字を使って生活するということがなかった。日本や朝鮮では、表音文字である仮名やハングルを用いて生活している。昔は朝鮮でも「漢字仮名混じり」ならぬ「漢字ハングル混じり」で書いていた時代があった。しかし、漢民族にはそれが無い。

しかも、漢字はそもそも「男の文化」である。「嫉妬」という字の構造を見て下さい。「しつと」は女がするものだけということになっていく（苦笑）。基本的に漢字というのは、紀元前の漢民族の男が作った文化です。

そうになると、漢民族の女性たちは漢字ばかりで自分たちの共感覚を表現しなければならぬ。ところが、そこに不満は存在しない。ついに数千年間、日本の仮名のような女性自身の手による文字を作り出すことはなかった。（時にその試みはあったけれど、主流になることはなかった。）そして、漢民族の女性は、漢字文化圏で育つということをやった後は、いきなり二十六個の表音文字であるアルファベットを学ぶわけだ。その間にあるべき、絵画的な表意文字から自分たちの手で女の文字を生み出すということを飛ばしてしまう。

そうになると、日本人女性が仮名で表現し得ている感情や共感覚が、

切り落とされる。僕が知りたいのは、その切り落とされた部分に他にない。これが、僕が感じた「じれったさ」だったと思う。逆に言うと、漢民族の女性にとっては、「漢字の形は絵画的だ」と感じるだけでも、共感覚を持つていことになり得るのかもしれない。文字がそれしかないのだから、仕方がない。しかし、それはそれで正解なのだし、豊かな感性なのだ。「文字に色が付いているなんて言うまでもなく、漢字自体が色彩豊かでしょう」と主張するかもしれない。

漢民族女性には、「自分たちで漢字をもとにして芸術的な曲線美を持つ文字を生み出す」という発想がない。つまり、文字に色が見える共感覚も、漢字と欧米のアルファベットにしか持つておらず、日本の仮名がすっく抜けているのだ。しかし、きちんとこちらが仮名の成立過程を説明したあとに、一貫して漢民族女性が日本の仮名を見つけたことは、「文字と言うよりは、何かの絵のようだ」ということだ。これを聞いて僕は、正直なところ胸が熱くなった。

僕は保守的な政治思想を持つているためか、よく勘違いされるのですが、漢民族や朝鮮民族の文化は、実に深い味があって、好きです。それらは、日本文化の先輩である。しかし、日本はただの後輩にとどまらず、独自の美意識を持った。そして、それは日本以外のどこにも実在しない美意識です。

そして今回、僕は日本人男性としての自分の共感覚が本当に好きなのだということが、改めて自分で分かりました。

それにしても、あと数十年も経てば、今英語や欧州語がベラベラであるというだけの日本人は、全く重宝されなくなるでしょう。今の時点で、何かしら隣の韓国や中国やアジアの文化の深さを知っている日本人、日本文化を片言の英語で説明できる日本人のほうが、やはり最後には勝ると思う。おそらく、アメリカは今のような地位にはいないと思います。「古今集と新古今集の違いを英語で言え」とか、「日本と朝鮮の仏教の性質の違いを英語で言え」などと聞かれて答えられないような日本人がしゃべる英語なんて、所詮、英語ではないと、堂々と言える日本人が増えることを願うばかりです。